

新型コロナウイルスの逆風下でも配当を増やす日本企業はどこか。2021年3月期の配当予想を開示した主な企業の前期の配当総額との増加額を調べたところ、首位はNTTドコモだった。上位5社は通信大手3社のほか、半導体や電子部品などの次世代通信規格「5G」関連銘柄がランクインした。今後の需要拡大も支えに手厚い株主還元を維持する。

コロナ禍で配当増額 首位はドコモ 通信堅実、5G銘柄も上位

順位	企業名	配当総額 の増加幅 (億円)	今期予想 1株配当 (前期比増額)
1	NTTドコモ	126.10	125(5)
2	東京エレクトロン	104.35	660(72)
3	KDDI	102.74	120(5)
4	村田製作所	83.17	110(13)
5	ソフトバンク	43.59	86(1)
6	伊藤忠商事	42.76	88(3)
7	富士通	38.09	200(20)
8	アステラス製薬	30.53	42(2)
9	芝浦機械	27.59	199.3(114.3)
10	NEC	25.69	80(10)
11	ニプロ	22.02	27(13.5)
12	ZOZO	21.37	37(7)
13	SGホールディングス	15.89	49(5)
14	住友不動産	14.22	38(3)
15	SCREENホールディングス	13.98	60(30)
16	日本瓦斯	11.49	100(30)
17	伊藤忠テクノソリューションズ	11.44	63(5)
18	アサヒホールディングス	11.19	160(30)
19	レンゴー	9.91	24(4)
20	日本新薬	8.76	99(13)

(注) 配当予想を開示している3月決算の主な企業は、前期比増額が20%以上ある企業は1株配当額を100円未満に四捨五入して算出した。日経NEEDS調べ

800億円減る見通し。こうした中で首位のNTTドコモは配当総額を126億円増やす。前期より5円増の125円を予定。これで7期連続の増配となる。企業向けにウェブ会議システム「安定した配当を続け、株主の期待に応える」との受注が増えるなどで、連結純利益(国際会計基準)は前期比2%増の6050億円を見込む。

3位のKDDIは前期まで18期連続の増配中。今期も5円増やす。5位のソフトバンクも2期連続の増配の見通しだ。日本企業の年間配当

性向は3〜4割が平均とされるが、NTTドコモが6割超、ソフトバンクが8割超、KDDIが4割超といずれも高水準だ。通信は景気などに業種が左右されにくい。ドコモの吉沢和弘社長は「安定した配当を続け、株主の期待に応える」と話す。

通信3社に割って入ったのが、2位の半導体製造装置を手掛ける東京エレクトロン、4位の村田製作所だ。通信サービスで5Gの収益化は先の見込みだが、東エレクトロンは中長期的に5G関連

連の需要の取り込みが期待できる。スマートフォンは今秋くらいから5G搭載モデルが伸びる。村田製の中島規巨社長は「半導体や電子部品の恩恵は大きい。リモートワークが広がりサーバー需要も拡大。東エレクトロンの今期連結純利益は前期比11%増える見通し。河合利樹社長は半導体前工程の製造装置に「新型コロナウイルスの影響を考慮しても(今年は)過去最高の市場規模になる」と強気だ。

同社は中期経営計画でも減らす。トヨタ自動車自己資本利益率(ROE)の配当予想は未定だ。

任天堂は最初に配当総額を297億円減らす方針を打ち出したが、巣ごもり消費の恩恵から20年4〜6月期の連結純利益は前年同期の6・4倍の1064億円と好調。今期の営業利益の会社予想は15%減だが、市場予想平均(QUICKコンセンサス、19社)は2割増の4387億円、株主還元への期待は大きい。

市場では「『あつまれ どうぶつの森』による力強い新規利用者の獲得は7〜9月期も継続中とみる」(ゴールドマン・サックス証券の宗像陽氏)との声もある。家庭用ゲーム機とソフト販売の好調さが持続すれば、配当予想の上方修正も視野に入る。

柘植康文、上原翔大、山田航平、小池颯、野口知宏が担当しました。

詳細なランキングを電子版メールケットにQRコードを読み取ると表示されます。